

Title	和泉式部正集の成立 : E歌群について
Author(s)	鳥居, 幸子
Citation	語文. 1973, 31, p. 32-42
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68608
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

和泉式部正集の成立

— E 歌群について —

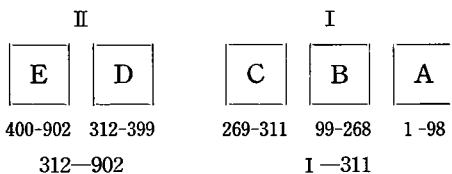
鳥居幸子

和泉式部正集の成立過程については、現在清水文雄氏によって、次のようなことが知られている。

この集は成立事情を異にするいくつかの歌群の集積されたものであり、同時に、各歌群相互の間には、重出歌が著しく多く存すること。

これらの歌群は本文自体の内証および、勅撰集や他の諸集との比較によって、ある時代にまず甲と乙とが結合して小歌集を成していたのが、つぎの時代に丙、さらに丁と合するといふやうに、かなり長期間にわたって、複雑な成立過程を辿り、その最後の形態が全体として成立したのが、千載集撰進年から、もっとも遅くて定家の歿年までの間であったと推定されること。

その雑纂の資料となった歌群とは、歌の重出関係、排列形態および内容の諸点から吟味して、成立の直接材料となったものは、I・IIの二大歌群であるが、さらに精査すると、IはABCの三大歌群の結合されたものでありIIはDE二歌群の結合されたものであることがわかる。ここでI・IIの二大歌群を考えるのは、重出歌がI



ないかと思っ
がすでに言わ
て、E群の構
解明してゆき

およびIIのそれぞれ自体内に皆無であること、さらに歌の排列形態からみても、前者がBを中心としてその前後にA・Cが附加された形としていつの頃からか存したと思はれ、これに対して、後者が、DE二歌群の結合された形において、ある期間存したことも考えられること。(注、これらについての考証は、清水文雄「和泉式部正集の成立」—国文学友、第一巻第一輯に詳しい)

二

清水文雄校訂「和泉式部歌集」902首について、清水論文の追試を試みた結果、私は、正集を形成する五歌群の一、E歌群について、

清水論文を進める手がかりをつかんだのではないかと思っ
がすでに言わ
て、E群の構
解明してゆき

B群(99/268) E群(400/902)は19首の重複歌をもつ。この19首の重複歌を中心として、その関連歌をぬき出してみると、後述の33首をあげることができる。ここで言う関連歌とは、贈答関係、詞書、歌の内容等から、重複歌と連作であることが明らかである歌の他、次のような場合も関連歌とした。

628 人かたらひたる男のもとより「わするな」とのみいひおこすれば
いさやまたかはるもしらすいまこそは人の心を見てもならはめ
629 おなじ人つねにわすれぬよしをのみいひおこすれば

——(省略)

右の場合、628はB群の212と重複している。629の詞書の「おなじ人」とは628の詞書にいう「人かたらひたる男」であろう。即ち629の詞書は628を意識して書かれている。この場合629はB群と重複歌を持たないが、628/212の関連歌としてぬき出した。

これらの関連歌は、E群の二首

788 おほろげにをしみし花のちりにける枝にさへこそめはとまりけれ
789 これを聞きて、人「さくらはいまさきなん、ちりにけるはなをば
なにかおもふ」といひけるに

まささまにさくらもさかばみにはみんなに梅の香をばしのびて
対してB群にも

213 むめのちりはてたるをながめて

おほろげにをしみし花は散りにけり枝にさへこそ目はとまりけれ
214 人の「いまさくらもさきなん」といへば

まささまにさくらもさかかんみにはみんなのむめのかははしのびて
のように788/213・789/214・と続いて重出している例もあるのである
から、本来なら、当然、他方にもあってよいものである。

このようにしてぬきだした33首について、E群B群の対照表を作ると表Iのようになる。これは次の場合におけることができる。

(1)一首対一首、二首対二首、等の単なる重複

(2)Eに関連歌があつてBにない場合。(3)Bに関連歌があつてEにない場合。

(4)(2)(3)の複合の場合

このうち(1)については問題がないので、(2)(3)(4)の場合に注目する(以下問題となるものだけを、表Iよりぬきだし、表IIに本文で示した。参照しながら読みたい)

三

これら(2)(3)(4)の場合を精査すると、それぞれの歌の有無が、単なる偶然ではなく、ある規則性をもっていることに気づく。私は、まず仮説をあげ、それによって(2)(3)(4)を解釈してゆくことで、仮説の正統性を証したいと思う。

私は、E群は、ある非常に詳しい資料から、意図的に和泉の歌のみを整理してぬき出したものであると思う。(これは、あくまで重複歌を中心とする33首のみから得る仮説で、この仮説のE群全体への環元については後述する。この場合はまず、重複歌を中心とする33首のみについて論を進める。)

右にあげた私の仮説に、まず矛盾することがある。E群がLの④804(表I)に和泉以外の人の歌を含むことである。E群が和泉以外の人の歌を含んでいたのではこの仮説はなりたてない。まずこの点から解決したい。

。表I・Lの場合。

これは二月末の梅の散り果てた頃に人(男)が来て、散り果てた梅を惜んだこと。同じその男が、四月二十余日、またまた山吹の散り果てた頃に来たので、どうして花の散ったあととばかり来るのかと云いあったこと——について詠んだ一連の歌五首である。E群に

246A返しをとこ 散りにけむ花をば今はいかがせん見てすぐしけん人にとはばやVがないのは、私の仮説によれば、和泉の歌ではないからだと解釈できる。また、E群は大変詳しい資料にもとづいているので、B群にない歌805をも有しているのだと解釈できる。けれども、E群が804に和泉以外の人の歌を含んでおり、詳しい資料があるにもかかわらず、B群の有する248を有していないのは、仮説に反する。もしが804和泉の歌、E群にない248が男の歌であれば、仮説にとって大変都合よいのである。そこでA全釈Vをもう一度詳しく調べると、問題の㊦(804↗247)は、梅の散り果てたあとにやってきた男が、またまた山吹の散り果てた後に来た四月二十余日の歌である。

(表II参照)

㊦ 247—このおなじとこを、又やまぶきのちりはてにたるに

けふまたなにか来つる

ひとへだにちりものこらず八重の山吹

㊧ 804—むめの花ちりて、くちをしがりし人の

また四月二十余日の程にきたるに

けふもまたなにかはきつる

ひとへだにちりも残らずやへの山吹

「全釈」は重出歌に対しては先出のもののみ通釈するという態度をとっているので、247の通釈はあるが、804の通釈はない。「全釈」による247の通釈は次のようである。

「247—同じこの男が、山吹のすっかり散ってしまっているときに

先日(は先日で桜(—鳥居注梅の誤りか)を見損ねたし、今日も又、何の為にここへやって来たのやら、楽しみにして来た八重山吹の一片だって散り残っていませんな」

このように「全釈」では247の作者を男と解釈している。従って、次の返歌248は和泉の歌と解釈している。

㊨ 248—かへし

ちりにきといひてややまん

山吹の折りからしたる枝はなしや

「248—返歌

散ってしまいましたな、なんてそんなあつさりしたあきらめ方があるのですか、ごらんあそばせ、あっちこっちに人が折り枯した山吹の枝があるでしょう。本当に花の好きな人は、盛りうちにみんな来て楽しんでいったのですよ。あなたには大体あきらめがよすぎるから、それでいつも花を見損ねるようなまぬけな事になるのですわ」

この「全釈」の解釈のように247を男、248返歌を女(和泉)ととつても、別におかしくはない。けれども、これは247、248の二首だけを見ているからである。歌はまだ続いている。B群にはないが、㊩に続いて㊪が詠まれているのである。㊩でAちりにきといひてややまん山吹のおりからしたる枝はなしやはVと詠んだのをうけて、

㊪ 805—「をりからしたる枝はおかずや」といひたれば

さてのみはやまじとおもへ

えだをさへ折りからしてぞ井手の山吹

と詠んだ。「全釈」は㊩を男の歌、㊪を女の歌と解釈したのであ

るから、当然④はまた男と解釈しなければならぬ。男が詠み、女が返し、また男が返したのである。しかるに、「全釈」は④85を女（和泉）の歌と解釈している。

「805——でも折りからしたる枝があるじゃありませんか。何で来たということもないでしょう」といつているので

あたしの方では山吹の花をみるだけではまだもの足りないで、枝まで折っては枯れるまで、めでていたのですもの、あなたもこれからは、そう始終、花をみそこねてばかりいないことにしようとかうらいは思つて下さいよ。はりあいのない」

「全釈」は805の詞書を『でも折りからしたる枝があるじゃありませんか』といつているので——と通釈して、805を和泉の歌とした。「……といつているので——といつているのは和泉だから、「折りからしたる枝があるじゃありませんか」といつたのは男であることとなる。「折りからしたる枝はなしやは」と男がいつたのであれば、先のへちりにきといひてややまん山吹の折り枯らしたる枝はおかずやVの歌は男の歌でなければおかし。つまりこうである。④⑤⑥は二人の人間が交互に歌を贈答したのであるから、④が男⑤が女であれば⑥は男でなければならず、⑥が女であるのなら、⑤が男④が女でなければならぬ。たまたまBに⑤がなく、Eに⑥がないことから、「全釈」を一見して容易にはその矛盾に気づかないけれども、④⑤⑥が一連の歌であることを知つて読めば、これはおかしいのである。

もちろん、「全釈」の著者は、これに気づいておられ、④⑤⑥とならべると、右のように作者が入れかわつてしまふことを気にかけておられる。けれども、気にかけて上で、やはり、この解釈が穩

当であらうとされたのである。詳しいことは何も述べておられないが、穩当というのは、おそらく次のようなことであるまいか。

④を男⑤を女と解釈したのなら当然⑥を男とすればよい。ところが、④はどうしても女の歌である。とすれば、⑥を支点にして、④を女、⑤を男、⑥を女とさかのぼつてゆけばよい。ところが④は八けふもまたなにか来つるVという歌なのである。客が訪ねて来たのに、女が客に対して八けふもまたなにか来つるVというだろうか？ そこで「全釈」は、たとえ作者が入れかわつても、やはり④は、やつて来た男が自分で八けふもまたなにか来つるVと言つたと解釈して、男の歌とすることが穩当と考えられたのだと思う。

私は、この「全釈」の態度に不満である。一つの歌の作者が、前条と後条で入れかわつていて穩当ということはない。私は和泉なら客に八けふもまたなにか来つるVと言ふと思うのである。この花見の一件に関する私の歌の解釈は次のようである。

④—247・和泉・梅の花が散つてくやしがつた人が、また山吹の散りはてたころ来たので

今ごろきたつて八重山吹のひとつだけ残つてやしませんよ（と軽い擲楡の調子で、和泉ならこのくらいのことはいふ）

（すると男は
④248—男—かえし

散つてしまつたなんていつてあきらめるものか、山吹の折りからした枝があるでしょう。（とやりかえす）

④805は、その男のケロツとした答えに半ばあきれながら、こっちは「えださへおりからして」鑑賞しているのに、「さてのみはやましと思へ」（「全釈」の通釈通り）と答えるのである。

右のように解釈しても歌意は通じ、作者が入れかわったりしないだけ自然である。

これでLは私の仮説を証しこそすれ、仮説に反することはなくなつた。ついで、同じくLの例によって、私の仮説の「Eは大変詳しい資料を持つ」という部分の根拠を示したい。

㊦ 248—かへし

ちりにぎといひてややまん

山吹の折りからしたる枝はなしやは

㊦ 305—「をりからしたる枝はおかずや」といひたれば

〜線部の類似に注意されたい。Eには㊦にあたる歌はない。けれども㊦の詞書が㊦のない事を補っている。㊦ 305「をりからしたる枝はおかずや」はどこからきたか？ やはり㊦の「おりからしたる枝はなしやは」から来たと考えるのが、妥当であろう。つまり、私はこう考える。Eが資料としたものには㊦も㊦もあつた。けれどもEは和泉の歌のみをとりあげる方針で、㊦をとらぬこととした。けれども、㊦㊦は関連した一連の歌である。㊦をとらぬために㊦がわからなくなつてしまつてはこまる。そこでEは㊦の省略を補うような詞書を㊦につけたのである。後述するが、このような例は、Lの㊦㊦の場合に限らず度々みられるものである。

さて、表Iに関して、私の仮説に矛盾する例がもう一例ある。これは先のL—804の場合のように、和泉以外の歌であるのにE群にあるという積極的矛盾ではなく、和泉の歌であるにかかわらず、E群にない、という消極的矛盾である。それは、N—250の場合であるがこれについては次のように解釈できる。

㊦—250 七月八日、大将殿よりありしはわすれて御返しにきこゆる
七夕のけふのよはひのうちかへりまたまちどほに物や思はん

㊦—251

彦星はおもひもすらんなかに秋はきのふのなからましかば

㊦—833 七月七日「たなばたまちどほにおもふらん」と人のいひたるに

彦星はおもひもすらんなかなかに

秋はこよひのなからましかば

B群には㊦㊦二首があるが、E群には、㊦しかない。大変詳しい資料をもつと仮定されたEが、何故、㊦を落としたのであろうか、㊦—833はA七月七日「たなばたまちどほにおもふらん」と人のいひたるにVの詞書をもつ。この「たなばたまちどほにおもふらん」というのは、やはり、㊦の「またまちどほに物や思はん」から来たものであろう。

事実どうであるかは別として、Bでは㊦は「大将殿よりありはわすれ」て、「御返しにきこえ」た和泉の歌であるとなつてゐるのに、Eの編者はこれを「人のいひたる」歌——Bの詞書でいえば「大将殿よりありし」歌と解釈したのであろう。

つまり、和泉の歌ではないから㊦を省略して、その省略を補うべく㊦ 833にA七月七日「たなばたまちどほにおもふらん」と人のいひたるにVの詞書をつけたのである。とすれば、これは、仮説に矛盾しない。

四

表I L・Nにみられた矛盾はこれで解決できたと思う。表Iに関

して、あとのすべての場合、私の仮説で解釈できる。表Iに関し
て、BにあってはEにない歌は、すべて、和泉以外の歌である（又
は、Bでは和泉の歌であっても、Eでは和泉以外の人の歌と解され
た歌である）。Eは、和泉以外の人が詠んだ歌は含まないが、和泉
が詠んだ歌に関しては、Bよりもずっと詳しく歌を録しているとい
える。Eは、おそらく、EとBをあわせみて想定されるよりも、も
っと詳しい資料から、和泉の歌のみを、整理してぬき出したもので
ある。例えば、表I・Kの場合、私達は、表より、①②③の三首を
知ることができる。Eには④がなく、そのかわりに、⑤⑥に、Aす
みよしに詣でたりける人、いとほどへて「いかが」などいひたるに
の詞書がある。④によれば、津の国の人は、津の国の住吉は、有名
なところだけれど、古今集にA住吉と海土は告ぐとも長居すな人忘
れ草生ふといふなりVというように、忘れ草の名所で、うっかり行
ってあなたを忘れたりしてはいけないので、決して住吉に行つた
りしないのだ、と言っているのに、Eの編者は、その複雑な内容
をあっさりと、Aすみよしに詣でたりける人Vとしてしまった。津
の国の人は住吉には行かないと言っているのであるから、この詞書
は事実には反するが、津の国——住吉——忘れ草の連想で歌が詠
まれていて、その④を省こうとする時、もし、⑤⑥にA津の国の人
いとほどへて「いかが」などいひたるにVという詞書を添えれば、
確かに④の内容には反しないけれども、⑤の歌との対応が悪く、⑥
を生かすことができない。その意味で、④の歌の内容には反しても
Aすみよしに詣でたりける人、いとほどへて「いかが」などいひた
るにVは、大変うまい詞書のつけ方であると思う。

⑦A津の国なる人「たびたびふみやりしはみぬか」といひたるに

——Vの津の国の人が、④の人と同じだという確証はないが、およ
らく同じ人なのであろう。そして、Eの800が④の歌の返しであった
ように、⑦も津の国から来た歌は、「たびたびふみやりしはみぬか」
という内容だったのであろう。Eの資料にはおそらくその歌も含ま
れており、この、Kの場合には、4首の歌を、資料本は含んでいた
のであろうかと考える。

五

さて、重複歌を中心とした33首から導いた仮説を、E群全体にあ
てはめることはできるだろうか？ むろんできない。もしこの仮説
が、E群全体にあてはまるならば、E群五百一首はすべて和泉の歌
ばかりでなければならず、清水氏がそれに気づかれぬわけがない。
結論から述べると、E・Bの重複部分より導いた私の仮説は、清
水氏がE群をさらにE^IE^{II}E^{III}E^{IV}にわけられた、そのE^I四百二十一首
の後半部に適用される。これについて詳しい事を述べるのは次の機
会にゆずりたいが、重複歌33首より得た仮説を、E群の二百余首に
適用できることから、この仮説は、正集の功を占める大歌群であり
ながら、その成立構造の定かでないE群の、構造解明の重要な手が
かりとなると思う。

(昭和四十六年度卒業生)

表I

	A			B			C			D		E		F		G		H		I				J		K			
	イ	イ	ロ	イ	ロ	イ	イ	イ	イ	イ	イ	イ	イ	イ	イ	イ	イ	イ	イ	イ	イ	ロ	ハ	イ	ロ	イ	ロ	ハ	
E	625	626	627	628	629	633	656	686	718	725	735	736	ナシ	788	789	ナシ	800	801											
			○		○																								
B	210	206	ナシ	212	ナシ	211	186	262	216	152	ナシ	252	253	213	214	243	244	ナシ											
	○	○		○		○	○	○	○	○	○	○	×	○	○	×	○	○											
	L						M			N		O		P		Q		R											
	イ	ロ	ハ	ニ	ホ	イ	ロ	イ	ロ	イ	イ	ロ	イ	ロ	イ														
E	787	ナシ	804	ナシ	805	814	815	ナシ	833	836	843	844	ナシ	849	850														
					○		○							○															
B	245	246	247	248	ナシ	219	ナシ	250	251	161	151	ナシ	183	184	160														
	○	×	×	○		○		○	○	○	○		×	○	○														

(注) 佐伯梅友・村上治・小松登美著「和泉式部集全釈」によって、和泉以外の人の歌に×印をつけた。

「全釈」は重出歌の先出のもののみ通釈しているので、重出歌には一方にしか印がない。

表 II

I		C		B	
㊥	㊦	㊥	㊦	㊥	㊦
736	735	629	628	627	626
はつむやは くさぐさに生ふとはきけどなき名をばいづらけふだに人	正月一日、はなを人のおこせられば 春やくる花や咲くともしらざりきたにのそこなる埋れ木 なれば	おなじ人、つねにわすれぬよしをのみ、いひおこすれば おこすれば いさやまたかはるもしらずいまこそは人の心を見てもな らはめ	人からたひたる男のもとより、「わするな」とのみいひ おこすれば いさやまたかはるもしらずいまこそは人の心を見てもな らはめ	てばこおきたるやるとて、おなじ人に おのがじしふれどもあめのしたなれば袖ばかりこそわか ずぬれけれ	心にもあらでよそなる男のもとに、雨のいといたく降る 日、「なみだの雨の」ととひたるに、女もこと人いでき にければ おのがじしふれどもあめのしたなれば袖ばかりこそわか ずぬれけれ
252	212	212	206	206	206
のつみける こまこまにおふとは聞けどなき名をばいづらはけふも人	ナシ	ナシ	こころかはりたるをとこの、「まくらしばし、おもひか はるな」となんいふに いさやまたかはりもしらずいまこそは人の心を見てもな らはめ	ナシ	こころにあらで、よそよそになりたる人に、あめのふる 日おのがじしふれども雨のしたなれば袖ばかりこそわか ずぬれけれ

		K			
㊦	㊧	㊨	㊩	㊪	㊫
	787	801	800		
ナシ	二月つごもりがたに、人々きて物がたり、「などしては なのちりにけるさうさうし」などいふに いたづらにかへらん事を思ふかなはなのをりにぞつぐべ かりける	津の国なる人、「たびたびふみやりしはみぬか」といひ たるに なには人なにはの事をかけりけむただこのたびぞみつの はままつ	すみよしに詣でたりける人、いとほどへて、「いかが」 などいひたるに 忘れぐさつむほどとこそおもいしかおぼつかなくてなが らへつれば		ナシ
246	245		244	243	253
とはばや 散りにけむ花をばいまはいかがせん見てすぐしけん人に 返し、をとこ	はるつかたの人のきたりければ、花もみなちりにければ、 みちなりなどにや いたづらにかへらん事をおもふかな花の折にぞつぐべか りける	ナシ	かへし わすれぐさつむほどとこそ思いつれおぼつかなくて程の 経つれば	津の国より、人のいひおこせたる 忘れ草つむ人ありと聞きしかばみにだにもみず住吉の岸	返し、おや なき名ぞといふ人もなし君が身に生ひのみつむと聞くぞ くるしき

M		L		
㊦	㊧	㊨	㊩	㊪
815	814	805	804	
<p>つねん 人もなく鳥もなからむ島にては此のかはほりもきみもた かへなくはあしかりなむ」とておこせたる をとこ、「これはなかすてつる、とりにたまへ、とり をどこ、「これはなかすてつる、とりにたまへ、とり をどこ、「これはなかすてつる、とりにたまへ、とり</p>	<p>懸想する人のきて、物などいひたる程に、こと人のきぬ れば、これかれたちわかるるほどに「あふぎをかたみに」 ととりかへてけり、つとめて、はじめの人にいひやる かたらはん人もなかりつとりかふとおもひしははやあふ ぎなりけり</p>	<p>手の山吹 「をりからしたる枝はおかずや」といひたれば さてのみはやまじとおもへえだをさへ折りからしてぞ井 手の山吹</p>	<p>の山吹 むめの花ちりて、くちをしがりし人の、また四月二十余 日の程にきたるに けふもまたなにかはきつるひとへだにちりもの残すやへ の山吹</p>	
	219	248	247	
<p>ナシ</p>	<p>り しのびて物いふ人のあるに、こと人のあれば、いそぎて 出づるに、あふぎかはりにけり、やるとて かたらはん人もなかりつとりかふと思ひしやる扇なりけ り</p>	<p>ナシ ちりにきといひてややまん山吹の折りからしたる枝はな しやは かへし ちりにきといひてややまん山吹の折りからしたる枝はな しやは</p>	<p>の山吹 このおなじをとこ、又やまぶきのちりはてにたるに けふもまたなにか来つるひとへだにちりものこらず八重 の山吹</p>	

Q		P		N	
㊦	㊧	㊦	㊧	㊦	㊧
849		844	843	833	
<p>さりけるをこの、とほぎとこらへゆくを、「いかがおもふ」といひたればわかれてもおなじみやこにありしかばいとこのたびの心ちやはせし</p>	ナシ	<p>ふねよせん岸のしるべもしらずしてえもこぎよらぬ播磨漏かな</p>	<p>播磨のひじりのもとにくらきよりくらきみちにぞいりぬべきはるかにてらせ山のはの月</p>	<p>七月七日、「たなばたまちどほにおもふらん」と人のいひたるに 彦星はおもひもすらんなかなかに秋はこよひのなからましかば</p>	ナシ
184	183		151	251	250
<p>わかれてもおなじ都にありしかばいとこのたびの心ちやはせし</p>	<p>赤染がもとよりゆく人もとまるもいかに思ふらんわかれてのちのまたのわかれを</p>	ナシ	<p>播磨のひじりのおもとに結縁のためにきこえしくらきよりくらき道にぞ入りぬべきはるかにてらせ山のはの月</p>	<p>彦星はおもひもすらんなかなかに秋はききのふのなからましかば</p>	<p>七月八日、大将殿よりありしはわすれて、御返しにきこゆる 七夕のけふのよはひのうちかへりまた待どほに物や思はん</p>